クロな視点からは裾礁やラグーンの発達する沖縄などを事例に，沿岸部からのサンゴ礁の発達状況と石干見の分布域の関係の考察，使用される石材の分布域などが挙げられ，ミクロな視点からは，複合的生業のなかでの石干見漁業の果たす役割の検討や，漁業活動の時間的な利用形態や漁獲量，漁獲物の分配などの分析が挙げられている。そして最後に，これらの研究課題群が模式図を用いて整理され，締めくくられている。

これまで評者の私見を含めて内容を簡単に紹介してきたが，読了後の率直な感想は著者の地域に対する誠実な姿勢があって可能となった研究と感じた。以前，評者を含めた教え子らが著者とともに「最後のスクイ」の見学と，動態保存に携わる漁業者を訪問する機会を得た。その時にも感じたことだが，著者は成果を次々と世に発信する「アタック」型の研究者である一方，フィールドを単にデータ取得の場としない「レシーブ」型の姿勢に基づく絶妙な関係である。基礎研究に軸足を置いた多くのフィールドワーカーは，地域の方々との関係が密になるほど，懇意にしてもらっている自分と，論文を書くための自分との間のなかで，自身の立ち位置のとり方に悩む。おそらく著者も，常に迷いながら関わっていることと想像されるが，経験不足の評者らからすると，現時点で考えうる地域とのベストな関係性を，本書を通じても感じ取れた。一点，経験不足の評者から，教えを請いたい点として，人文地理学者として地域の方々へどのような貢献方法があるのかといった点を挙げる。著者は，石干見の保全活動の支援やコーディネイトを挙げているが，これは著者の人柄に合った「寄り添い方」にも読み取れた。つまり，他分野の研究であっても可能となる方法とも考えらえる。本書を通じて，人文地理学ないし地理学ならではのアウトリーチ・アクションリサーチの方法に関する見解の提示があっても良かったかもしれない。ただし，他分野に埋没しない地理学からのアウトリーチ・アクションリサーチの独自性については，著者だけに課されることではなく，全ての地理学者が考えるべき段階にきているともいえる。評者を含めて学界全体で考えるべきことであろう。

以上，評者の雑感を含めてまとまりのないものとなったが，本書は特定のモノを詳細に紹介することにとどまらない地理学的研究の深みに触れることができる重厚な研究書といえる。ジオパークや伝統的文化など特定のモノや事象を事例とした博士論文を執筆しようとする院生にも参考になると考えらえる。「漁業のことだから」と食わず嫌いをせず，枠組みに注目して読んでみると新たな発見を得られる一著であろう。蛇足であるが，本書は著者の「石垣マニア」に端を発した研究と思われる。日常生活上の興味・楽しみを研究に引き上げられるのも地理学の魅力の一つであろう。

（吉田国光）

フィル・ハバード，ロブ・キチン，ブレンダン・バートレイ，ダンカン・フラー著　山本正三・菅野峰明訳：『現代人文地理学の理論と実践―世界を読み解く地理学的思考』明石書店，2018年11月刊，412p., 5,800円（税別）

この度，山本正三・菅野峰明両氏による『Thinking Geographically: Space, Theory and Contemporary Human Geography』（Hubbard et al. 2002）の訳書が出版された。本書は元来学部生向けの教科書である。しかして教科書であることは内容の簡易凡庸なることと同義ではない。かつて五経や聖書の如き難読の典籍が初等教育に用いられたと同じく，本書が教科書である所以は学術的思弁の基礎を初学者に伝えんと欲する点にあ

る。訳者の山本氏も「一般的に見られる形式の教科書と思いながら見ていくと，人文地理学の本質論が議論される諸章が展開されているように見えた」（p.409）と述べる通り，本書が読者に与える印象は所謂教科書のそれとは大きく隔たっている。そしてその懸隔にこそ本書が真に教科書たる理由が発見されるのである。はしがきに見える著者の言を借りれば，「理論が地理学的知識の生産をどのように規定するかを示すこと」「理論を取り上げることがなぜ重要であるのかを説明すること」（p.vii）がこの教科書の執筆目的であるという。本書が教える所は常識的な地理学的事実ではなく，それら事実を地理学的に解するための理論にある。いかなる学問も各々の理論を以てただ一つの現実を解釈する。地理学的事実とは理論によって地理学的なりと判断されたる所の事実である。そうであるからには，この判断の出所を知らずして地理学を理解することは不可能であろう。本書に与えられた「地理学的思考」なる名は他ならぬこの地理学理論による現実の理解を意味している。そして本書は，それなくしては地理学自体の成立さえ危ぶまれる基礎理論を紹介し，読者に「地理学的思考」を可能にするがゆえに，凡百の諸書にも増して教科書たる資質を備えるのである。

かような特質を有する本書は第1部「人文地理学の理論化」と第2部「理論地理学の実践」という二部によって構成される。その題目からも察せられるようにこれらは理論編と実践編を成しており，前者は現代即ち第二次世界大戦以降の地理学理論そのものの展開を，後者は同じく事象の現代地理学的解釈の例を，それぞれ概観している。かつ注意すべきは，この両者が相互を補完するように構成されていることである。紹介される各個の理論は自ずと具体的な現実の解釈を促し，地理学的解釈の実践例はその母体となる理論の存在を示唆して已まない。以下に各章の内容を略述するが，本書の各部各章はいずれも完全な共同執筆であり，4名の原著者はいずれも全章の執筆者であることを付言しておく。

第1部「人文地理学の理論化」は3章より成る。第1章「理論への導入」はまずもって理論と哲学の必要を説く章である。本書によれば，地理学はおろかあらゆる思惟が理論を必須とし，更に理論は哲学の内にのみ存在するとされる。ここで言う哲学とは「あらゆる思考で用いられる定義と前提を厳密に問いただすこと」（p.4）であり，特に存在論・認識論・イデオロギー・方法論の四者において種々の地理学理論を支えるものである。本章はかような哲学の定義に違わず，地理学そのもの，そして空間，場所，自然という三種の基礎概念の定義を斟酌し，現代地理学の用いる最も根本的な「定義と前提」を「厳密に問いただす」。これによって哲学が理論を生み，理論が地理学に多彩な研究成果をもたらすことを示している。

第2章「地理学思想史の概観」は，前章の吟味を具体的な地理学理論に向けるものである。本章は極めて分析的な地理学史略とでも称すべきで，一般的な教科書に記されるような，探検と発見の時代から地誌学，そして空間科学や行動主義，人文主義や構造主義等の思潮が混濁する現代へと連なるという地理学史が展開されるものの，随所に学史の背景を為す哲学に関する詳細な説明が付加されている。例えば，シェーファーによる「例外主義」批判を紹介する際にはコントの実証主義やポパーやラカトスの論理実証主義に関する言及があり，初学者は勿論，既に学史を知悉する読者に対してさえも，深甚な思索を促すのである。

第3章「新しい理論，新しい地理学？」は，上記の概念や学史の検討を踏まえ，「現在最も影響力のある理論的枠組み」（p.80）である文化地理学，批判地理学，ポストモダン地理学，ポスト構

造主義地理学の知見を呈示する。本章こそは第1部の佳境であり，独自の趣を持つ筆致に彩られつつも反面常識的な範囲の叙述にとどまった前2章に対して，本書の内包する思想を存分に披歴する。淀みない例示と各所に挿入される人物紹介による思想解説とが相俟って一見すれば絮説とさえ感じられる程であるが，それも内容の豊穣の証左と言うべきであろう。

かくして地理学理論の基礎概念と通史，そして現状を吟味した本書は，その理論の実践へと目を移す。第2部「理論地理学の実践」を構成する5章は，現代特有の地理学理論に招来された新たな地理学的研究の動向をまとめたものである。

まず第4章「身体の地理学」では構造主義に基づく「身体」に関する地理学的研究を紹介する。この「身体」は人類の肉体であるよりもむしろ個人の肉体およびその付属物と考えるべきもので，「社会的で生物学的」（p.142）とされる如く，多分に文化論的な性質を持つ。本章はカルチュラル・スタディーズや精神分析学を多分に引用しながら，バレンタインやシブレーの研究に触れ，英国地理学の特徴的な潮流を伝えている。

次ぐ第5章は「テクストの地理学」と題される。この「テクスト」も所謂文章としての語義から脱し，情報を伝達するあらゆる事物と解される概念である。本章は文学や映画の地理学的解釈，そしてコスグローヴの「新しい」景観論に言及し，「テクスト」を扱う研究を概観する。本章においてもテクスト論とマルクス主義やポスト構造主義との関係にも注意するように，本書の哲学と理論の一貫への確信は徹底されている。

第6章「貨幣の地理学」も，やはり所謂経済地理学とは似て非なるものである。本章は，「貨幣は社会のために働」くとする言説と，むしろ貨幣は「社会を支配する」とする言説（p.222）の二者にまつわる所説を述べるとともに，ハーヴェイの政治経済学やアグニューとコーブリッジの「地政学的経済論」などを紹介し，更にそれらが金融ネットワークや金融センターの地理学的研究につながることを示している。

第7章「ガバナンスの地理学」では前章に類似する主題が扱われている。「ガバナンス」とは主権政府あるいは統治機関governmentに対する「政府機関の代表者とビジネス界と他の非政府機関との間の…提携関係」（p.257）を指す概念である。本章は前章に増して思想的で，政治形態や国家に関する様々な理論が語られるものの，地理学からの逸脱を感じざるを得ない点も少なくない。

第8章「グローバリゼーションの地理学」は「グローバリゼーション」を批判的に解する諸研究に基づいている。「一貫性のない統合失調症的概念」「漠然とした不明確な概念」（p.301）とまで辛辣に表現された「グローバリゼーション」は，その性質ゆえに論述しがたいものであるとしながら，特に「空間と時間」の収束あるいは圧縮を論じた諸家の言を徴することによって，世界展開する超国家企業と文化的同一化の根源となる「グローバル・メディアスケープ」との関係や，「超現代性」「世界都市」に関する研究を紹介する。そして，これらの実践例に一つの理論ないしは哲学が伏流することを暗に示すのである。

本書の末尾には，第3部として第9章「結び」が付されている。ここでは地理学における理論が互を非難しながらなおも共存する「まれにみる多様性」（p.346）を称えるとともに，二律背反に類する六つの設問を以て読者，特に初学者が地理学者としていかなる立場にあるかを教えようと試みる。第2部の絢爛たる事例の集積によって幻惑の中にあった読者に，本書が教科書であったことを想起させる瞬間である。かくして読者は高遠なる省察の中に真正の「地理学的思考」を手にすることになる。

最後に，敢えて要望を述べるとすれば，理論上哲学上の偏りの補完が必要であるように思われた。本書は全編を通して配置されたコラムにおいて，現代地理学の精華たる理論の形成に影響を与えた人物を紹介するが，その撰は果たして教科書たるに相応しいものであったか，一抹の疑念が残る。例えば，コラムには地理学理論に関する重要人物としてアントニオ・グラムシ（p.103）やミシェル・フーコー（p.155）の名が挙がるが，これらの人選が「地理学的思考」を初学者に涵養せんとする本書の目的と合致するであろうか。現代地理学への影響のみを鑑みても，少なくともカントやフンボルト，英語圏に限ってもデーヴィスやサウアーを措いてまで書き残すべき人物とは考えられない。より広い関心の下，地理学に関する理論家を紹介するならば，本書は一層普遍的な「地理学的思考」の教科書となったであろうと惜しまれるのである。

されどこれは所謂白璧の微瑕に過ぎない。本書は地理学が，そしてあらゆる学術が理論無しにはあり得ぬことを率直に伝え，地理学的思考は地理学的理論によってのみ為し得ることを知らしめる真の意味での教科書である。かつ，掴み難い現代地理学思想の現況の真摯な案内であることにも変わりはない。多くの初学者に，常に初学者たらんとする好学の士に，必読の教科書として本書を強く推薦したい。

（益田理広）

平岡昭利監修・須山　聡・宮内久光・助重雄久編著：『離島研究VI』海青社，2018年10月刊，208p.，3,700円（税別）

島をフィールドとした研究をまとめた『離島研究』は，最初に刊行された2003年以降，数年に1冊のペースで継続的に出版されてきた。本シリーズの編者として長らくシリーズを牽引した平岡昭利氏が『離島研究III』等の業績で本学会の学会賞（2010年度）を受賞していることもあり，本シリーズについてよくご存じの方も多いと思われるが，今回『離島研究VI』が刊行されたので，その内容を簡単に紹介したい。

シリーズ6作目となる本書は，長らく編者を務めた平岡昭利が監修となり，須山聡・宮内久光・助重雄久が編著者となる布陣変更が行われたが，その構成に大きな変更はない。離島をフィールドとする12の論文が3部にまとめられている。その構成は以下の通りである（カッコ内は著者名）。

Ⅰ　島のかたち
　1章　「究極の過疎」無人島の発生－過疎化言説に翻弄された島じま－（須山　聡）
　2章　沖縄県宮古島・狩俣集落の空間的構造とその変化－地形的条件および土地所有との関わりにも注目して－（山元貴継）
　3章　離島の暮らしの持続性と食料供給－山口県周防大島を例とした検討－（荒木一視）
Ⅱ　島のなりわい
　4章　愛媛県日振島における水産業と生活形態（淡野寧彦）
　5章　東京都利島における高齢者のツバキ実生産とその意義（植村円香）
　6章　沖縄県離島におけるコンビニエンスストアの立地展開とチェーン間競合（宮内久光）
　7章　長崎県小値賀島における観光まちづくりの展開（中條曉仁）
　8章　沖縄県宮古諸島における観光振興とその「反作用」（助重雄久）
Ⅲ　島のくらし
　9章　東京都三宅島神着における初午祭の継承に関する文化地理学的研究（筒井　裕）
　10章　鹿児島県奄美大島におけるIターン者の